

～旧約聖書を読んで感じること～ (88) シュネムのマダム

ある日、エリシャはシュネムに行った。そこに一人の裕福な婦人がいて、彼を引き止め、食事を勧めた。以来彼はそこを通るたびに、立ち寄って食事をするようになった。彼女は夫に言った。「いつもわたしたちのところにおいてになるあの方は、聖なる神の人であることが分かりました。あの方のために階上に壁で囲った小さな部屋を造り、寝台と机と椅子と燭台を備えましょう。おいでのときはそこに入ってください。」(列下 4:8)

裕福な、おそらく美しい人でもある女性がエリシャを「聖なる神の人」として尊敬し、もてなしただけでなく、エリシャの部屋まで用意しておいたとは、なんと幸いなことでしょうか。エリシャが彼女の親切に感謝して、「あなたのために何をしてあげればよいのだろうか」と尋ねたところ、彼女は「私は同族の者に囲まれて何不足なく暮らしています」と答え、何も求めず、無償の奉仕をしています。

実は、彼女は年取った夫と暮らしていましたが、子どもがいませんでした。物質的には恵まれていても、不妊の女、神の祝福を受けていないという暗黙の非難に晒されていたのではないのでしょうか。けれども、彼女は自分の人生を受け入れ、エリシャのような清い人物に触れ、神に奉仕することで、慰められ、喜んでいたのでしょう。そして信仰に従って、決断力をもって行動するマダムでした。

エリシャは従者ゲハジから彼女に子どもがいないことを聞いて、「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱いている」と祝福を告げました。彼女は「いいえ、私の主人、神の人よ、はしためを欺かないでください」と、懐妊など、全く諦めきった返答をしましたが、エリシャの告げたとおりに、男の子を産みました。

男の子が成長し、畑にいる父親のところへ行った時、頭が痛むと言って倒れてしまいました。父親はすぐに従者に母親のもとに連れて行くように命じました。息子は母親の膝の上でじっとしていましたが、昼ごろに死んでしまいました。彼女はエリシャのためのベッドに息子を横たえ、夫に「神の人のもとに急いで行き、すぐに戻る」とだけ言って、ロバで出かけました。夫はこの日が礼拝のための新月の日、安息日でもないのにと訝りましたが、彼女は理由も告げずにエリシャのもとへ駆けつけました。エリシャは彼女の夫、息子の安否を尋ねるようにゲハジに命じましたが、それに対しても彼女は「変わりはありません」と答えてから、エリシャの足に縋りついた時になって、始めて「私があなたに子どもを求めたことがありますか」と気持ちをぶつけました。



シュネムの婦人 Jan Sluijters (1881-1957)

エリシャはすぐに事情を察し、ゲハジに、誰にも挨拶をしないで、シュネムの彼女の家に先に行って、自分の杖を子どもの顔の上に置くように命じました。彼女は「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしは決してあなたを離れません」(列下 4:30)とエリシャに全幅の信頼を寄せました。エリシャは彼女の家に着くと、死んだ息子を見、その部屋に息子と二人きりになって、主に祈りました。それから寝台に上がり、子どもと、口と口、目と目、手と手を重ね合わせると、子どもの体は温かくなり、くしゃみをしてから目を開きました。それから、従者ゲハジに命じ、母親を呼ぶと、彼女はエリシャの足元に身をかがめ、地にひれ伏して、自分の子どもを受け取って出て行きました。非常に不思議な成り行きです。秘密裡に全てが行われました。子どもが死んだとは誰も口にせず、ただ、主に祈って、息子が生き返ったことを、この三人が体験したのです。

イスラエルに飢饉が起きる直前に、エリシャはシュネムのマダムに、住みよい地へ移るように勧め、彼女は従いました。飢饉が終わった後、帰国し、家と畑の返還を王に求めました。エリシャの従者ゲハジがエリシャのあの奇跡を王に語っている時に、当人のマダムが息子と共に来たので、王は「この婦人の物をすべて返しなさい。またこの地を後にした日から今に至るまでの畑のすべての収穫も返しなさい。」(列下 8:6)と命じ、エリシャへ畏れを抱き、シュネムのマダムに起こった奇跡に報いています。